

中央大学附属高等学校の開設

戦後、新制大学を発足させた本学は、旧制学部の予備教育機関であった予科廃止に対応して、新たな学生確保の方向を新制の附属高等学校併設に求め、一九五二（昭和二十七年）年五月、中央大学杉並高等学校を開設した。

同校は、当初四千坪の校地（借地）に木造校舎（三階建て四八〇坪・二階建て四四八坪）および体育館・武道場等（平屋建て二二〇坪）の諸施設を有した。しかし、入学生徒数は予想を超えて急増し、五五年に校舎（二階建て一三六坪）の増築を行ったものの、慢性的な校舎不足に陥ってしまった。

さらに陸上競技部（五六―五八年関東大会・東京大会優勝）をはじめとして、バレーボール部（五八年全国大会・国体東京都代表）やバスケットボール部（五九・六〇年全国優勝）など、各種運動部の活躍がめざましくなるにつれ、狭隘な運動場や体育施設の改善が強く望まれるようになった。

このような杉並高等学校の教育環境を刷新するため、同校の移転を計画し、五九年一月まず移転用地として小金井市貫井北町の農地一万一千余坪を買収・仮登記し、同年九月には同地を学校用地に地目変換して登記を完了した。次いで、六一年三月の評議員会では、校舎新築経費二億円のうち一億円が新年度予算に計上・承認され、翌年七月に小金井新校舎着工の運びとなった。

他方、杉並高等学校では、新校地での校舎建設を促進するため、五九年六月にPTAを中心とする「中央大学附属杉並高等学校校舎建設促進会」を結成した。同会は、三年間にわたる募金活動を精力的に展開し、着工時、本学に校舎・講堂兼体育館の建設資金として三千万円を寄付した。

右のような経過を経て、六三年三月、鉄筋コンクリート造りの小金井新校舎本館（事務室ほか、四一九坪）・一号館（教室、一、九〇四坪）・二号館（体育館兼講堂、

六三三坪）が竣工し、あわせて陸上競技場や野球場など体育施設も整備された。

ところで、新校舎が完成する二カ月前、本学は小金井に開設する高等学校、すなわち杉並高等学校の移転先を、新設の「中央大学附属高等学校」（全日制普通課程、男子）として設置認可を得ていた。またこれと同時に、杉並高等学校の存続を図って同校の学則変更（全日制普通課程、男子部・女子部併設）の認可も受けていた。



竣工時の中央大学附属高等学校全景（1963年4月）

こうした法的

手続きを経て、従来の杉並高等学校の教職員と三学年生徒全員は当初の予定通りそのまま小金井に移り、四月から附属高等学校教職員・生徒となった。他方、学校施

設のみとなる杉並高等学校については、急遽杉並高等学校改組委員会が組織され、同委員会のもと教職員採用と生徒募集が矢継ぎ早に進められ、新規の教職員と新生により四月から発足した。

新設の中央大学附属高等学校は旧杉並高等学校の小金井移転にともなう校名改称であり、学則を改正して存続した新杉並高等学校は全くの新設校であるというのが実態であった。

『中大杉並高校新聞』第五一号（六三年一月二十日）によれば、小金井移転をひかえた岩本春市杉並高等学校長は生徒に対して、「校名が中央大学附属高等学校と改まっているので、形の上ではあたかも新設校であるかのごとき観があるけれども、事実現在の中央大学杉並高等学校校舎を活用して、新機構、新組織をもとに、男子部・女子部の生徒を新しく募集して新発足せんがために採られた、手続上の必要にせまられてかような形となったので、決して附属高等学校が新らしく発足するのではなく、また現杉並高校が古いままのものではなく、かえって杉並高校の方が新組織のもとに新発足するのである」と説明していることから、その実情がうかがい知れる。